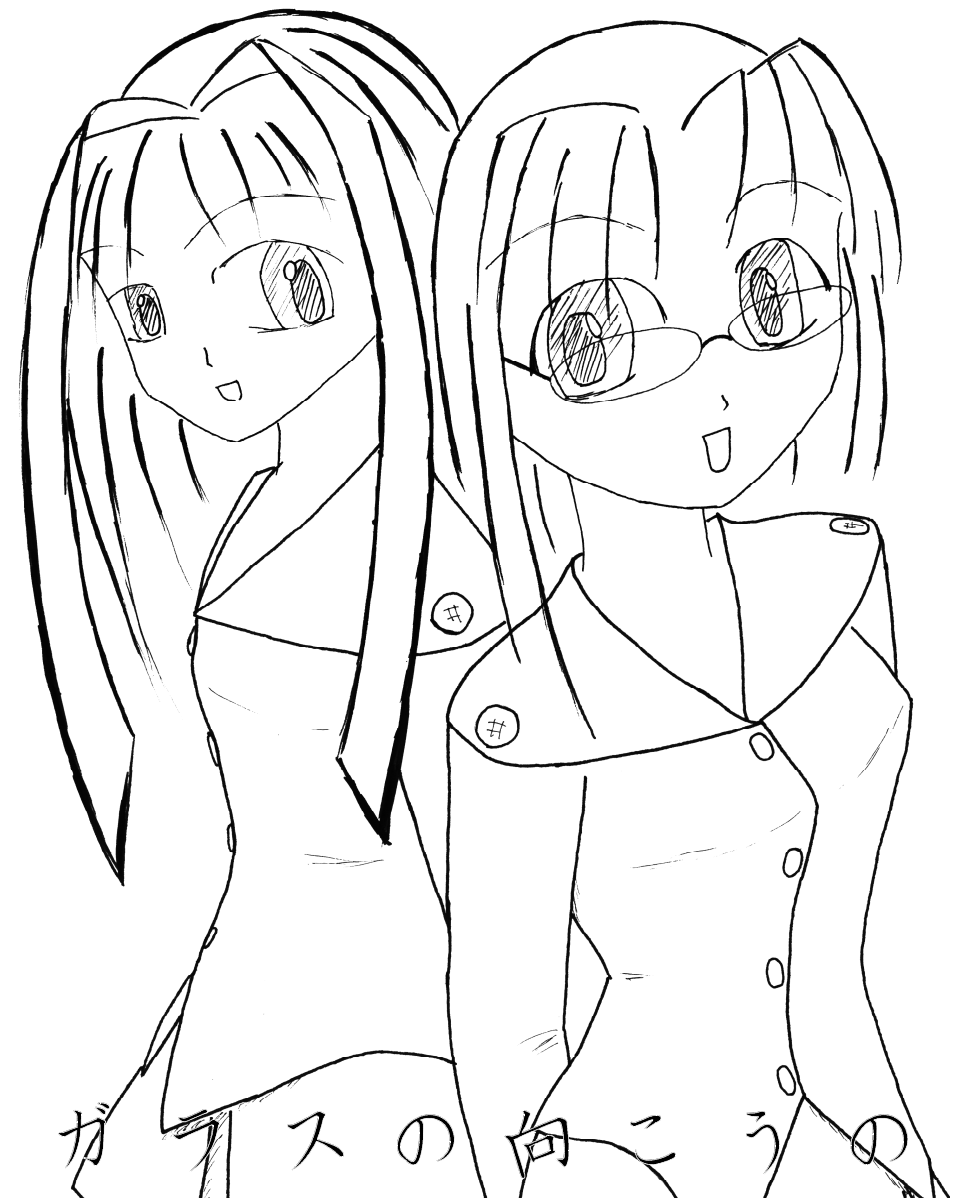




ガリスの向こうの

side B 女の子の秘密 お姫さま

確かに私は特殊な存在かも知れないけど、この記憶以外は至って普通なんだろうと思う。だから周りの女の子たちと同じ。同じように恋もできるんだと思う。

きつとこれが初恋だから、本当に恋かどうかなんてわからないけど。多分、そうだと思う。だから私は、あなたに告白します。

「君のこと、好きだよっ。」

通い慣れた高校の過ごし慣れた教室に、初めて経験する空間が生じた。放課後の喧噪にぽっかりと開く、無音の穴。私の周りの数人は、息をのみ、世界の色を失ったかのよう。

この世界の中心には、二人。私とあなた、小田明くん。そんなこと明くんだってわかっているはずなのに、すつとぼけた答えを返すんだから。

「え、えつと、オレ？」

ほらね。何でもわかってるわけはないと思うけど、何でもわかっているかのように慌てない、穏やかと言うよりは何か足りない感じ。

だからってわけじゃないけど、そんな明くんが好きです。でもやつぱり、少しはびっくりして欲しいな。女の子が突然告白しているんだから。無反応じゃなんか悔しい。

私は想いを込めて、コクンと頷いた。目一杯の笑顔はきつと、可愛く見えるよね。

「えっ、あ、その、ほら、なんだ、待て。ちよ、ちよつと待って。オレか？」

魔法なんてないけれども、女の子の笑顔はやっぱ魔法。顔をにわかに赤くして、今更事態に気づいたみたい。とりあえず、嫌われてはいないのかな。よかった。

もう一度、コクンと頷いて。もつと可愛く上目遣いに、私はまた明日の挨拶をした。

「うん、でも、答えは今すぐじゃなくていいから。ね。それじゃ、バイバイ。」

そう告げると世界は色を取り戻し、喧噪の中に飲み込まれていった。同時に私は喧噪を離れ、背中に幸せを感じながら廊下を歩き出した。

今すぐじゃなくていいなんて、期待してるんだ。私ったら。

今頃になってドキドキしてる。緊張で手が震えて、きつと真つ赤なんだろうなってぐらに顔が熱い。ふわふわしているのか、ふらふらしているのか、足下はおぼつかない。

秋の日はもう暮れてしまい、街灯のともる帰り道を、一人、歩いている。私は久恒かな子。高校二年生の女の子。童顔、しかも身体も小さいので中学生と間違えられたりもする、可愛い女の子なのです。なんてね。でも、顔にはちよつとだけ自信があつて、自分でも可愛いなつて思う。えつと、そうじゃなくつて、なんて言うか、中身を考えたら嘘みたいに可愛い。そんな感じ。他に外見上の特徴は、そう、顔や身体の割には胸が大きい。私自身はどうしても好きになれないんだけど、私は私だから仕方ないのかな。それにこれからは、明くんが好きって言ってくれるかも知れない。男の子は胸が大きい方が喜ぶつて、私は記憶している。

その明くんが、私の意中の人。フルネームで小田明くんはクラスメイトの男の子。外見にこれと言った特徴はないけど、いつも笑顔でいる人。それだけが特別で、あとは特に何も無いと思う。なんて言うとかちよつとひどく響くけど、とにかく、私は多分、明くんが好きになつた。気づいたらいつの間にか目で追うようになっていて、隣にいてみたいなんて思つた。だから恋なんだなつて考え、そして、告白した。それが今日までのあらすじ。

学校から十五分ほど歩き、帰りの人で溢れる電車に乗り込む。そろそろ多少は落ち着いてきて、どんな答えが返ってくるのかなとか、つきあい始めたなら毎日はどう変わるんだろうとか考えていたら、ふと気づいてしまった。多分、好きになつた。でも、どうして好きになつたんだろう。明くんと私はあまり仲のいい方でもなく、ほとんどしゃべったことすら無いと思う。私が目で追うようになったのだって最近、ここ二、三週間のことで、それからいつでも笑顔なんだって気づいたんだよね。：じゃあ、どうして好きになつたの？ 好きになつた理由がない。混雑した電車内でもそうだとわかるように、くつついて立っている二人。私の目の前にいる、

私と同じ制服の男女はきつと、彼氏彼女なのだろう。この二人は、どうしてお互いを好きになったのかな。その答えはわかるはずもなく、わからなければならぬことでもないと思っていたけれど、やつぱり不思議だとも思っていた。

告白の翌日、今朝の空と同様、心の中も澄み渡っている。昨夜は熱が冷めなくてなかなか寝付けなかったけど、今朝目が覚めたらすっかり治まっていた。

「おはよう、明くん。」

教室に入ると先に来ていた明くんには、意味深に余裕ありげな、明るいついでご挨拶。本当はすつごく意識しているんだけど、「意識していかないから普通に接してね、昨日の答えもゆつくりでいいんだよ」ってちょっとお姉さんぶってみる。そういう女の子の方が、きつと好きだよ。それともドキドキして声もかけられないような、そんな子の方が好きかな。でもやつぱり見た目が子どもっぽい私だから、中身ぐらいは、ね。子どもじゃ相手にしてもらえないよね。

そんな私の気持ちを知ってか知らでか、明くんはわずかにうわづった声で答える。

「お、おはよう。久恒さん。」

まともに目を合わせてくれないその姿が、妙に可愛い。普段はひょうひょうとした明くんも、さすがにご乱心の様子。期待して、いいんだよ。

わずかに一言を交わしただけの朝だったけれども、とても幸せな気分だった。実は幸せってどんなのかわからないんだけど、これが幸せなんだろうなって思えた。だからやつぱり、好きなんだろうなって改めて思った。

しかし告白したところで私と明くんの関係が突然変わるわけではない。今まで話す機会すらほとんどなかったの、やつぱりあまり話したりもしないし、そもそも一緒にいる時間なんてありっこない。相変わらずその姿を目で追っていて、時たま目があつたら手を振ってみたり、思いつき笑顔を送ってみたり、そんなことをするようになった程度。

そして夕方になると、朝と同じく。

「また明日ね。」

「あ、うん。じゃあね。」

どこことなく不自然さの漂う挨拶をして、お別れする。

その翌日も、翌々日も。告白するだけで何かが変わると考えていたわけじゃないけど、こんなにいつも通りだと……。どうしたらいいのか。所詮は「余裕ありげ」な私だから、できればすぐに答えは欲しかったし、答えがもらえるまでの待ち時間のことなんか考えていなかった。記憶にもない。何もできぬまま待つていたら、三日間が過ぎていた木曜日の放課後。

今日も「また明日」といつも通りの挨拶と、日に日に余裕が減っている笑顔を向けて教室を出た。火曜日、木曜日は五時限しかないため、少しでも早く帰りが早い。まだ夕日が差し込む時間帯。

私は昇降口を過ぎて、旧特別教室棟、通称旧校舎へと向かった。

この高校では数年前に新校舎が建てられて以来、旧校舎は使われていないそう。それ故に当然立ち入り禁止、戸締まりもなされていたが、なにぶん古い建物。壊れた扉もあり、割と容易に入り込めた。

どうしてこんなことをしようと思ったのかはわからない。でも気づいたら、帰りがちょうど夕暮れ時になる日には必ずこうしていた。

旧校舎には新校舎からも、校庭からも、そして学校の敷地の外からでも死角となる位置に、壊れた窓がある。扉も兼ねていたようなその窓から入って、ほこりっぽい廊下を半分ほど歩き、右に折れて階段を上る。最上階、と言っても二階の廊下を左に進み、美術準備室と掲げられた一室のドアを開ける。

オレンジ色の夕日が差すその部屋は清掃がなされ、小綺麗に整理されていた。先月、二学期

が始まると同時に転校してきた私が、そうしたから。

二脚置かれた椅子のうち、今日は一脚に先客が座っていた。
「こんにちは。」

驚く風でもなく声をかけてくれた彼女は、秋川紅葉（あきかわ もみじ）。この高校の一年生で、転校してきた私に初めてできた友達であり、今、友達と呼べる唯一の人かも知れない。人が嫌いとか、人に嫌われているというわけでもないと思うけど、私に友達と呼べるほどのつきあいをしている人はいない。転校生だからというわけでもなくて、多分、私がそういう人なんだと思う。前の学校では一人も友達がいなかったと、記憶している。

「来てたんだ。」

いつも通りに言っただけで、私はもう一脚を借りた。何をするわけでもなく、ただ、この部屋から夕日を眺める。とっても綺麗な夕日を眺めるだけ。ここはそのための場所。私はそうすることが好きでもあった。

ただ今月に入ってから、ちょっと状況が変わった。時折こうして、紅葉とお話をする場にもなっている。

「どうかしたんですか、かな子さん。」

「どうもしていません。」

何も知らないはずの紅葉に、箭庭に言い当てられてしまう。やっぱり余裕ありげにお姉さんぶってるだけなんだよね。気色や声色でわかっちゃうのかな。

誰よりも大きな悩みを抱えていた、少なくとも私にはそう見えた紅葉だから、あるいは人の悩みにも敏感なのかも知れない。

「なら、いいんですけど。かなさんにも悩みがあるんだなあ、つてびつくりしたのは取り消しですね。」

いたずらっぽく言う紅葉は、夕日を浴びているせいか、余計に大人っぽく見える。年上じゃないかと見紛う、綺麗な、美しい笑顔。

私は大人だから、あなたのお子様なお悩みを解決して差し上げますよ。なんかそう言われて

いるような感じがして、ちょっと悔しい。年下の子だからってバカにするわけじゃないんだけど、やっぱり私は年上で、ちょっとお姉さんでいたいんだから。もちろん、紅葉がそんなことを思っているはずはないんだけどさ。

でも確かに、紅葉は私よりお姉さんかも。今時、高校二年生で初恋なんて、ねえ。

「取り消さないで驚いていいよ。この歳で初恋して、告白して、答えをもらえず落ち着かない。それが顔に出ちゃってる。」

私ってお子様だよねと自虐的に、夕日に向かって小さく答えた。

背にある彼女の表情は見えないけれど、最近見せるようになった穏やかな、綺麗な笑顔が伝わってくる。私はそうしてあげられたのかと自問してしまうような優しい声。

「初恋の時期なんて、人それぞれだと思います。私もあまり早くはなかったの……。」

「でも、もう経験済みなんですよ？」

「それは……。」

意地悪する気があって言ってるわけじゃないけど、嫌な感じに響く。これじゃ紅葉を責めているみたいだ。

「ごめん、ごめんね。そういうわけじゃなくて。」

何がそういうわけなのかもさっぱりわからないけど、とにかくそうじゃないのと彼女に向き直ると、なんだかおかしそうに笑っている。

「わかってます。かなさんのこと、わかってますから。ね。」

：これが経験者の余裕？ ついこの前とは立場が逆転しちゃってる。何もその立場を守ることに私の役目でもないけど、やっぱりちょっと悔しい、羨ましいと思うのは私が今の私だからかな。やっぱり恋は、経験していなかっただろう。

落ち込んだわけでもしよげたわけでもないけれど、何となく消沈してしまった私に、紅葉は話を続けてくれた。

「中学三年のとき、同じ演劇部の人が好きだったんです。見た目も性格もよくはなかったのですが、意外と地味に裏方やってたりしたところが、素敵だなんて思っていました。」

そう言うのと、紅葉の視線は私からはずれた。どこか遠くを仰ぐその瞳は、いつもより輝いて見えた。この距離ではばやけてしか見えないけど、きつと、夕日のいたずらではない。

「ある時、思い切って告白しました。私にも当時は憧れがあつて、つきあつてみたいなんて思つたんです。でも、ふられちゃいました。別に、好きな人がいたんですよ。それじゃあ仕方ないですよ。」

「そっか。でも、なんか、いい思い出なんだね。」

うつすらと涙を浮かべた瞳を持つ、飾り気のない笑顔はとても紅葉らしい。華やかではないけれども、凜とした美しさ。童顔の私なんかより、男の子は紅葉みたいな子が好きなんだろうなあ。明くんにも他に好きな子、いるのかも知れない。そんなこと、考えもしなかったよ。今度私が、彼女の向こう見ていたことに気づかれたみたいで、ばつが悪そうな紅葉の声が聞こえた。

「はい、とつても。今のかな子さんと、きつと同じでした。」

にこつと笑い直してそんなことを言われると、ちよつと恥ずかしい。何とも答えようがなく、照れ隠しに質問してしまつた。

「紅葉は、今、好きな子いないの？」

恥ずかしさのあまり、なんてのじゃない。ただの幸せぼけだ。彼女には聞いちゃいけない。それは私が、一番よくわかつていなければならぬ。

「ごめん、」

とにかく、謝ろうとしたとき。

「いますよ。」

私の発した声に、彼女の科白が重ねられた。

え？　今、なんて言つた？

「心配しないでください。大丈夫です。」

ぽかんとする私に、紅葉はあっさりと告げた。そして恥ずかしげに目をそらしながらも、続けてすらすらと。

「誰かは教えてあげませんけど。それじゃあ、私は先に帰りますね。」
あ…。

日が暮れてもなお明るい笑顔はくりと表情を隠し、扉の向こうにひよいと消えた。

「紅葉も明くんが好きだったら、どうしよつか…。」

薄暗い部屋の中で一人、私は思つてしまつた。多分、その答えは決まっているのだろう。

ここからの夕日を明くんと、いつか、いつか一緒に観たいな。

一人夕日を観るのが好きなんで、おかしい子だと思われちゃうかな。でも、紅葉は氣に入つてくれたし、大丈夫だよね。

そう、きつと、大丈夫。

今日から新しい一週間。

んーっ、眠い。今日はまだ眠いけど、私は決めたんだから。もう肌寒い秋の夜長に、私は決心した。

待つてただけじゃダメ。私も何かしなくちゃ。

結局先週は答えをもらえないどころか、告白以降は何もないまま終わってしまった。このままだと、今週も、来週も、再来週も。

でも何をしようか？　という段になると経験不足故にどうしたものかと悩んでしまったが、私の記憶によればお弁当を作つてあげるなんてのがびつたりみたい。

「ふふうん、お料理は毎日しているから、得意なのですよ♪」

鼻歌とも独り言ともつかない妙な節を付けた科白が、まだ暗いキッチンに響き渡る。

「お弁当もお、毎日自分で作つてるですよ♪」

いつも通り明かりをつけると、いつも通りにお弁当を作り出した。少しだけ違ふとすれば、お弁当箱が二つ並んでいることぐらい。

ううん、全然違ふ。確かにやっていることは同じだけれども、明くんのために作っているん

だっと思うととっても楽しい。けれども、凄く緊張する。お料理には自身があるけど、私が明くんに好かれている自信は、ない。告白したときは、結構自信あったのに……。

やっぱり、かれこれ一週間も返事をもらえないのは自信をなくしている大きな原因だと思う。どんなときでも、相手の反応がないのは一番怖い。今もそう。でも、私の身体は怖くなくなる方法を知っている。反応しちゃうようにしてあげればいい。

できあがったおかずを手際よくお弁当箱に詰める。慣れたもので、今日もあつという間に終わった。二つものお弁当箱は鞆に入らないので、小さめの手提げ紙袋に入れ、完成つと。

ついでの作った朝ご飯を食べて、制服に着替えて、今日も元氣に行ってきます。今まで経験したことがないほどに昂ぶった気持ちのまま、勢いよく扉を開けた。

もう完璧っ。なんて思いながら飛び出す私。なんだか、自分が自分じゃないみたい。

「明くん、もしよかつたら……、一緒にお弁当、食べない？」

四時限目を終わると素早く、でも自然に彼の横へと私は歩んだ。そして相変わらずさりと、なんでもないことのように言つてのける。

まだノートに落としていた明くんの視線が、すつと上向き、私をとらえる。

「ん、いいよ。」

わずかに震えた声は、早鐘の響く私の中にもちゃんと届いた。落ち着いた風な無表情だけど、やつぱり、ドキドキしちゃうよね。きつと、私と一緒に。実は私たち、似ているのかも知れない。それとも、みんなそうなのかな。見るからにおっかなびつくり話しかけるなんて、私の記憶だけに存在する虚像なのかな。

そう考えている間に席を立った明くんを、私は先導するように歩き出す。そのまま混雑した廊下を抜けると、考えていたシナリオ通りに多少は人が減る昇降口付近で横に並ぶ。

明くんがいつも、購買のお弁当かパンを昼食にしていることは織り込み済み。だからここで二人分のお弁当があるんだよって伝えて。

「あのさ、明くんの分もお弁当作つたんだ。一緒に中庭で食べよ。」

返ってくる反応は、当然「OK」だよな？

意識して作つた笑顔を見せて、期待いっぱい瞳でちらりと見ると、明くんは小さく頷いて答えてくれた。

「うん。ありがと。」

照れていてるからなのかいつも通りなのか、その素っ気ない表情まで計画通り。

とにかくドキドキして落ち着かずにはいた、さっきまでの私に言つてあげたい。あつという間に、うまくいくつて。

秋の日差しの中でもまだまだ暖かい中庭には、先客が何組かいた。女の子同士でにぎやかにする子たち、ぽけーっと寝ころぶ男の子。私たちと同じように、きつと恋人同士でお弁当を食べる人たち。あ、私たちはまだ、恋人ではないんだけど。

木々や花壇にも手入れが行き届いている中庭には、お茶会でも開けと言わんばかりのテーブルセットがいくつもおいてある。そのうちの一つがまだ空いていたので、お互いに言葉を交わすこともなく、そこに辿り着いた。

「座ろつか。」

「そだな。」

思つたよりも事は自然に運び、私もだいぶ落ち着いてきた。正面に座る明くんの反応も落ち着いているように思える。息がぴつたりとか、気が合うとか、そういうのとは別だけど、なんか一緒だよな。そう思った。

もうすつかり、いつも通りの私。

「はい、お弁当。」

言葉少なにお弁当を差し出すと、彼も一言だけ添えて受け取つてくれた。

「ありがと。」

明くんも私も、あまりおしゃべりな方ではないから、こういう方が落ち着いた状態。せつかく一緒にお昼を食べているのに会話がないなんて残念かな、とも思つたけれど、心地よい空気

に身を任せた。

「いただきます。」

二人でそう言うと、穏やかに時は流れ出した。

お弁当を食べる明くんの顔をちょこちょこと見ながら、多分、私もちょこちょこと見られながらも、何を話すこともないお食事の時間。

何度目かの視線を向けたときに目が合うと、明くんは聞いてきた。

「この焼きリンゴ、おいしいね。久恒さんが作ったの？」

うん、私が作ったんだよと答えようとしたけど、箸の指す先、お弁当箱の中を見て違う答えが口について出た。

「え、それ、先に食べたの……？」

だって、ご飯だってほとんど残っているのにデザートを食べるのっておかしい。この順番で食べて欲しいというのもないけど、デザートはやっぱり最後にと思ってたから、つい言いやってしまった。

予定外の発言に戸惑ったのは私だけではなくて、明くんも少し慌てた様子でまるで弁解でもするよう。

「あ、ごめん。甘いもの好きでさ、あると一番に食べちゃうんだよね。やっぱり、デザートは最後だよな、ごめんごめん。」

「ううん、ごめん、別に謝るようなことじゃないよ。デザートをおかずにしたって、全然いいって。」

いや、デザートをおかずにするのはさすがにおかしいよ。言ってしまったあとでまた「あっ」と思うと、気づかれちゃったのか、明くんは小さく笑っている。それでいながら重ねて言うのだから意地が悪いよ。

「おかずにはしらないと思うけどなあ。ま、それはさておき。」

本当は全然悔しくなんかないんだけど、ぷーつと頬をふくらまして顔だけそっぽ向いた私に、明くんはにこにこ続けた。

「このお弁当、久恒さんが作ったんだよね？ 料理うまいんだ。」

「うん、私が作ったの。料理は得意なんだ、普段から作ってるから。」

きつと満面の笑みで、私は答えた。ひよつとしたら料理は特技の一つ。そのことがこんなにうれしい日が来るとは思わなかった。

「実はオレも料理得意なんだよね。久恒さんと一緒、いつも作ってるからさ。」

明くんはさりと答えるが、この歳の男の子が料理を得意とするなんて珍しいんだよね。話を聞いてみると、おうちでの夕食はほとんど毎日、明くんが作っているそう。

だからってどうってことはない共通点にうれしくなっちゃうのが、恋愛なんだという記憶を思い出す。確かにその通りだな、と感じていた。

ちなみにそれでもお弁当を作らないのは、朝は眠くてダメだからだって。今度、起こしてあげようかな。なんてね。それはもつとずつと、先のことなんだよね。

このお昼休みから、私たちの関係は少しだけ変わった。

何もなくても目があつて笑顔を交わすようになった。私が目を向ければ、必ず明くんも目を向けてくれている。それだけ、でも全然違う気が私はしていた。以前は私が見ているだけだったのだから。

この変化はきつと、明くんが私を想ってくれているから。なんて、ただの思いこみだろうか。休み時間に一緒にいたり、学校への行き帰りをともにしたり、そんなことはまだしていない。だから傍目には大きく変わっていないように見えるのかも知れないけど。明くんだけ感じえたのならそれでいいと、私はすっかり恋をしていた。

それでも私は私で、忘れてはならぬことを忘れてはいないのだろう。そんなことはまだできない、いや、もうできないのかも知れない。そう訴える身体に心が引き戻される。

今日も「また明日」と笑顔で明くんの前を離れ、放課後特有の喧噪に包まれた廊下を歩いて

いると、後ろから声が飛んできた。
「もうお帰りですか？」

声の主である紅葉は歩みを早めて私の隣に並ぶと、会釈をしてにこっと微笑んだ。私と同じように通学鞆を提げて、これから帰りますという格好の彼女。言わんとしていることが今ひとつわからない。

「うん、帰りだけど。日が暮れちゃったら、あの部屋にも用はないから。」

「別に日が暮れても、二人でいる意味はあると思いますよ？」

紅葉の言葉と、その表情に驚きながら私は答えていた。何かを楽しみにするかのような笑みさえ浮かべているが、ましてや日が暮れたあとの旧校舍に行くことは、決して楽しいことなんかじゃないはず。たとえ私が一緒だとしても、それは変えられないと思う。

なのにわずかな翳りもない笑顔でそう言ったのだ。いったいなぜ。

「違いますよ。小田さんと、ですよ。だいたい、一人で帰っているのもおかしいです。」

く、ちよつと怒ったように紅葉の言葉は続いた。

「旧校舍なら本当に二人きりですよ？ 何でもできちゃうのは、かな子さんもよくご存じのはずですよ。」

「だから、ねっ」とひよいと目の前に出た紅葉。私は静かに、その手を取った。彼女はきよんとした様子。私にも本当の気持ちを感ずることなんてできないけれども。それは彼女にとつて、精一杯の勇気に違いないと思えた。ごめん、私が守るべきなのに、情けないよね。

「ごめんね、紅葉。無理しなくていいから。私のことなんて、気にしないで……」

「無理なんかしていません。嫌なこともありましたが、かな子さんと出会えたのもそのおむ。」

かげですから。今は、今はもう怖くありません。」

そう言いながらも涙が浮かんだ瞳に、私は何も言うことができなかった。やつぱり怖くて、無理をしているように思えてならなかった。でも、その覚悟に見合うだけの返答は、今の私に用意できるはずもなかった。

私は目をそらし、今、どうしたらいいのかを必死で考えた。ここまですべてうまくいっていたのに、まだ終わっていないかった。そして、終わらせることが如何に難しいかを初めて知った。

「それに今は、かな子さんの幸せが、私の幸せです。……本当です。」

頭上から響きが消える頃、私の身体に冷たい風が触れる。顔を上げれば彼女は一歩先にいて。「今の、みなさんに変な目で見られちゃいましたね。ごめんなさい。でも、あたしは平気ですから。それじゃあ、私は帰ります。がんばってくださいね。」

「バイバイ」と手を振りくるつと背を向け、彼女は遠ざかっていった。その表情はとても明るく楽しげに見えたから、私はまだ、理解できないままだった。記憶は笑顔を信じろと言うが、初体験には戸惑わざるを得なかった。

一晩考えても、紅葉の気持ちを理解することはできなかった。だから、紅葉の言葉を、言葉の通り受け取ることにした。今の私が考えたところでのめをはずす可能性は高い。それに紅葉の本当の気持ちがいずれでも、明くんと私がうまくいつて欲しいという言葉は変わらないように思えたから。

誰かに応援してもらえることがこんなに心強いとは、今日まではわからなかったな。そんな私が、彼女を支えることはできていたのだろうか。

答えは出せずにいたが、今はとにかく、応援に励むために。今日で最後にしよう。遅かれ早かれ多少の騒ぎとなってしまうが、致し方あるまい。

「久恒さん、このあと、暇？」

考えを巡らせていると突然、誰かが私を呼んだ。

明くん、間が悪いよ……。今日は土曜日なので、午前中で授業は終了だ。それ故に誘ってくれたのだろうけど、私もそれ故に誘われてしまうわけにはいかない。

「ごめんね、今日は、今日だけは用事があるの。本当にごめん……」

心に迷いはないけど、本当にごめんなさい。教室内での行為としては似つかわしくないとわかりつつも、どうにか気持ち伝わってくれるようにと頭を下げる。最良の方法かはわからなくとも、これしか記憶になかった。

「あ、いいんだ、気にしないで。急に誘われても困るよな。じゃあ、また。」

そう言って去っていく明くんの後ろ姿を見ずとも、落胆の色は感じ取れた。私だったらやっぱり、落ち込んだりうから。でも、ごめん……。

どうしても、やらないといけないことがあるの。
静かに教室を出て、私は一人、旧校舎へと向かった。

その行為がどのような意味を持つのか、私は記憶をしていた。告白までした相手の誘いを断って行くことでもないことも、むしろ。

それでも今日で終わりにできるのなら、許されるよね。そう思いこむほかないよ……。

脱がされた制服をおおざっぱに着て、教室の窓から外を眺めた。校庭を挟んだすぐ向こうに新校舎が見える。私のぼやけた視界にも、四階の一番右にある窓がどうにか見えてしまった。私が午前中、授業を受けていた教室。ここは別世界が広がる教室。

あの教室にいる私と、今この教室にいる私と、どっちが本当の私なのかな。

今の私が、この教室にいる私が望まれた私。これが私のあるべき姿だと身体は覚えている。でも、あの教室にいるときの、笑顔でいる私が本当の私だったらしいのに。相変わらず行っていたことを苦だとは感じなかったけど、気持ちと身体にはわずかながらも乖離が生じていた。終われば普通の人間になる。それはこういうことなのかと、初めての感覚をゆっくり受け入れた。

生臭く汚れた身体を綺麗にしたいとも思ったが、なにぶん初めてのことで、用意もなければどうしたらいいのかもわからない。仕方ないのででかい身体を壁に預け、遅鈍に腰を下ろして座り込んだ。

誰もいない教室にも、幾分か赤みの増した、静かな日の光は差していた。ほこりっぽい空気のせいで余計にぼやけて見える視界には、いくつが残っている机と、散乱したゴミが映されている。その先の廊下にも、誰もいない。

退屈な視界を遮り、まどろみに身を任せながら「更衣室の近くにシャワールームがあったなあ」と改めて考える。今までは気にも留めなかったのに。

「久恒さん？」

ふと声が聞こえた。誰なのか、すぐにわかった。

だから、目を開けることも、返事をすることもできなかった。

それでも確実に迫ってくる足音に降参して顔を上げ、明るさを取り戻すと、ハッキリ見えるほどの近さに。

「あつ。」

明くんがいた。小さく驚きの声を上げた私に、ぎこちない笑顔が向けられた。

「風邪、引くよ。」

そう言う彼の手は、私の制服のボタンをかけていた。慣れた手つきであつという間にボタンをかけ終わると、彼は私の隣に座る。何を言うでもなく、ただ隣にいた。

こんな場面を見られては、もうどうにもならない。今更手遅れ。誰彼かまわずセックスするような女の子を、好きになってくれる男の子なんていない。記憶は冷静に、私に告げてきた。

それでも、いや、だからだろうか、何も聞かれていないのに、私の言葉が口を割った。

「やっぱり、わかっちゃったよね。」

何をいけしゃあしゃあと言ってるんだろう。そう考えながらも、私の持つ希望を捨てられずにいる。

平然と不安の間で、視線を隣に向けることはできなかった。ただただ、茫然と。明くんの表

情を見ることができず、突然に返ってくるかも知れない答えを待つ。

「まあ、多分な。」

幾許かの間を経て返ってきた答えに、私の希望は失われたけど。不思議と落胆をするようなことはなかった。覚悟できていたからではなく、多分、落胆できるだけの経験が私にはないのだらう。今の私には平然と、受け入れるしかないんだ。

そんな状況下でも優秀な身体は反応し、忘れてはならぬことを果たす。もう私の言葉など必要とされず、話すことは凄く楽だった。

「端的に言えば、私は複数の男性の性欲を処理するためだけに、セックスをしていた。それも今日が初めてじゃないし、私が望んでやったの。」

そう、私が望んでやった、私だけの問題。部外者に知られてしまうことは予定外だったけれども、これで、私が守るべきものは守れる。

未だそこにとどまろうとする私を無理矢理引っ張り、私はゆつくりと立ち上がった。どうしても「ごめんなさい」と伝えたがったが、そうしたら本当に、気持ちと身体が分かれてしまいそうに怖かった。未経験な状態に、守るべきものを託すことなど到底できない。

プリーツのよれたスカートを整えて、歩き出す。

でも私の手を、誰かがつかんだ。誰かが。

振り返ると、明くんは笑いながらも困った様子。そして、ゆつくりとした声が聞こえる。

「このあと、暇？」

私はコクンと頷き、うまく作れなかった笑顔で答えた。

「ごめんね。お待たせ。」
シャワーを浴びて少しだけ綺麗になった私には、ハッキリと明くんの笑顔が見えた。夕日はいつもより鮮やかで、窓の向こうには旧校舎が、お気に入りの部屋の窓が見えた。これが、私の生きてゆく世界。

「あ、眼鏡かけるんだ。」

「うん。と言っても、今日初めてかけたんだけど。似合うかな？」

明くんはすつと後ろを向いて、廊下を歩き出した。

追いかけるように歩き出した私は、もう一度聞いてみる。

「ねえねえ、似合うかな？」

どうしてもその答えが聞きたい。どうしてもなのは、わからないけれど。

私は明くんの半歩前に出て顔をのぞき込み、歩みを止めた。

「ま、まあまあ。オレは好きかな。」

「ありがと。私も、好きだよ。」

あからさまに視線をはずして答える明くんには、満面の笑みでお返しをした。不意に触れた唇に、戻される視線。明くんには今の私が、どういう風に見えるのかな。

初めて見た明くんは想像していたのとちよつと違っていたけど、私はやっぱり好き。だって、私が好きになったんだもの。

どうしても決まってしまうキスに、慣れない心がドキドキしていた。

私には無理です。

あんな告白をされてはさすがに……。嫌いになることはないと言い切れますが、平気な顔はしてられないとも言切れます。もしかしたら、どういう顔をしたものかわからず、平気な顔のまま固まっちゃうかも知れませんが。それでも多分、平気そうなことを言って、相手の気持ちを考える余裕もなく、優しいと思える言葉をかけたりするんでしょうね。ぎゅって、抱きしめながら。

潔癖性だという自覚はありません。おそらく違うのだとは思いますが……。絶対ダメです。一生耐性が持てない気がします。それ故にロリなのか、ロリ故にそうなのか（笑）
みなさんだったら、どんな反応をされますか。

お久しぶりです、予定通り再会できたことには私が一番驚いていたり……。そして、初めまして。そう伝えられる方が今回は多いといいのですが……。

このお話は、さかのぼること数ヶ月前、さよちゃんの（笑）コミックマーケット68で配布した『ガラスの向こうのお姫さま side A 男の子の告白』の続編と言うか、別視点編です。

件の夏コミ本は私のデビュー作だったわけですが……。画力のなさのあまり、何とか描けるようになっていました。そして、やはり画力のなさからいくつかシーンを省いたため、説明不足の点がここ一番に……。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。そんな中、ありがたいことに「どうしても理解できない」という感想をいただきましたので、若干の変更を加えつつも、小説版としてもう一度お届けすることにしました。

最大の謎（と言うより抜け落ち）であった旧校舎での出来事。その表層だけは、このお話で見えたのではないかと思えます。そこでさらに浮かび上がってくる（ようにしたつもり）謎は、なんと（笑）年末に続編としてお届けする予定です。もちろん、季節は巡ってクリスマスのお話。

いやあ、ホントですか？ それ。だって年末までつてもう、あまり日がありませんよ？ しかも、クリスマスだって今思いつきで言っただでしょ？ あたしってば、知らないよ？ とまあ、いきなり難航の予感もしますが、がんばります。これを仕上げるために、私はクリスマスも独り身なのです（笑）

このお話を書くにあたり、ちゃんとかな子ちゃんの正体（？）も設定してあるので、あとはそれをどう魅せるかですね。と内情をちらつと話してみたところで、そろそろお別れです。

あ、そうそう、眼鏡は無理矢理じゃありませんよ。眼鏡時空4用に付け加えたわけではありません。

ちゃんと当初から、夏コミ本の最初のプロットの時点で、こうなっていたんです。理由もあるんです。ホントだってば。この辺も年末の続編で……とは言えませんが（笑）

それでは、今度こそ。イベントあわせで半ばβ版の段階、そんな代物を最後までお読みいただきありがとうございます。

ではまた、クリスマスか、冬コミでお会いしましょう。お会い、できますよーに……。

二〇〇五年十月、また表紙がまだ。

ガラスの向こうのお姫さま -side B 女の子の秘密-

Fukapon

2005 年 10 月 16 日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか
印刷/製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2005 Fukapon.
<http://www.projectkaigo.org/>